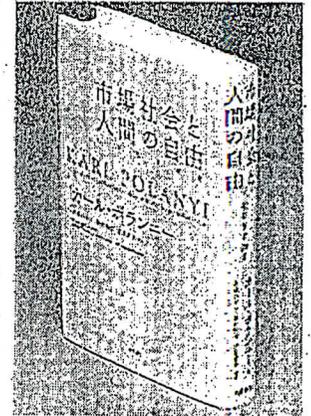


市場社会と人間の自由

カール・ポランニー著

人間から乖離する社会



(大月書店・3900円)

1886~1964年。ハンガリー出身の社会学者。主著に『大転換』など。

何故いまポランニーか。私たちが直面する社会的課題の数々がこの問いの答えになっている。グローバル化が猛威を奮う今日、民主主義のいびつな姿が世界を覆い尽くしている。ウォール街での暴動や反原発運動は氷山の一角に過ぎない。市場経済と民主主義すなわち経済と政治の矛盾と乖離は史上類を見ないほどに拡大している。市場経済の浸透が伝統的な社会統合を破壊し、やがて市場経済それ自体が瓦解するというポランニーの『大転換』の世界は、一層現実味を帯びている。本書は、ポランニーの未刊行論文並びに公開された論文の一部を再編集したものである。とりわけ、今日の意義の大きい市場経済と民主主義の対立関係についての論考が多く収録されている。第1部は市場経済と社会主義の緊張関係を理論的に考究し、第2部は社会主義とファシズムの隆盛を受けて市場経済と民主政治との関係を論じ、また第3部は市場経済を見据えての人間の自由を検討している。

いかなる人間的な社会も「自由」の概念なしには考えられない。そのことは疑いない。しかし、市場経済の「自由」は、人間が人間であることを許さないような不平等な構造を内包している。その処方箋として、市場から社会を防御する政治的イデオロギーが社会主義とファシズムであった。社会主義は、資本主義を廃棄して経済の「民主化」を追求し、ファシズムは民主政治を切り捨て、国家システムを改変することで資本主義の再構築を企図していた。

もちろん、時計の針を戻すことはできない。過去一世紀にも及ぶイデオロギー合戦の結果、社会主義とファシズムの挑戦は駆逐された。しかし、このことは市場経済と民主主義との矛盾が解消されたことを意味するわけではない。経済的な自由と政治的な平等との齟齬という難問に対して、私たちがいまだ正解に到達していない。未来の見えない時代だからこそ、過去の古典から学ぶべきものがあるのではないだろうか。時宜に合った良書である。若森みどり、植村邦彦、若森章孝編訳 (九州大准教授・政治学 大賀哲)